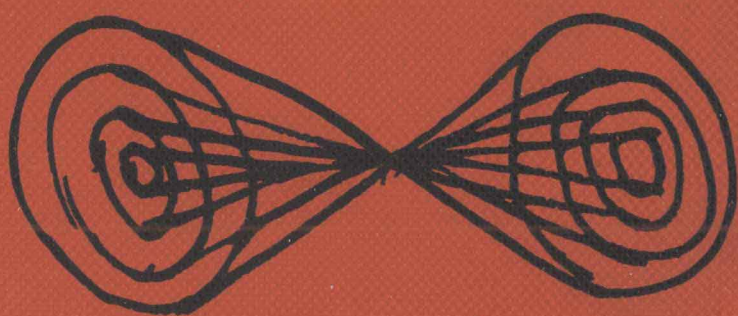




中國散文選

伝記篇 書簡篇 雜文篇

三木克己・今鷹 真・興膳 宏・吉川幸次郎
都留春雄・内田道夫・小尾郊一訳

世界文學大系

72

筑摩書房版

世界文学大系 72

中國散文選

昭和40年8月14日発行

編 者 吉 川 幸 次 郎

発 行 者 古 田 晁

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

目次

伝記篇

吉川幸次郎編
3

書簡篇

内田道夫訳
143

雑文篇

小尾郊一訳
261

解説

伝記篇
書簡篇
雑文篇

吉川幸次郎
内田道夫
小尾郊一
377 372 367

裝
幀

庫

田

發

伝
記
篇

漢書 霍光伝

班固
三木克己訳

(一)

霍光^{かくこう}は字^{あな}を子孟^{しもう}といつて、票騎將軍^{ひょうき}霍去病^{かくきへい}の弟である。父の中孺^{ちゅうじゆ}は河東郡平陽^{へいよう}の人。県の官吏となつて、平陽侯^{へいようこう}の家のご用をつとめていたが、侍女^{しよじよ}の衛少兒^{ゑいせうじ}と私通して去病^{きへい}が生まれた。さて中孺^{ちゅうじゆ}は勤めがすんで家に帰り、妻を迎えて光を生んだ。そのような訳で、衛少兒^{ゑいせうじ}との仲は絶ち切れてしまつて、何の便りもなくなつたのである。かなりの月日が流れて、少兒^{せうじ}の妹^いの衛子夫^{ゑいしふ}が、武帝から寵愛を受け、間もなく皇后の位につくことになつた。

霍去病は皇后の姉の子であるといふので、武帝から愛されたが、やがてたのもししい若者に成長した。彼はいつしかその父親が霍中孺^{かくちゅうじゆ}といふものであると知るようになったが、積極的^{きふせき}にさがし尋ねることもしなかつた。ところが、たまたま票騎將軍^{ひょうき}に任ぜられて、匈奴征伐に出かけることになり、その途中、父の郷里の河東を通ることになった。河東郡の太守は郊外まで出迎え、弓矢を背負い、馬にまたがって先導し、敬意を表するのであつた。平陽の宿舎に着いたとき、去病は部下の軍吏を使者として、霍中孺を呼び迎えた。伺候した中孺は、謹しんで面前にすすみ拝謁した。今を時めく將軍の去病も、拝礼をもつて父を迎え、ひざまずいていった。「わたくし、以前はこの身が父上の子であると存じませんでした。」中孺は地に頭をつ

漢書 霍光伝

(二)

霍光^{かくこう}、字^{あな}は子孟^{しもう}、票騎將軍^{ひょうき}霍去病^{かくきへい}の弟なり。父の中孺^{ちゅうじゆ}は、河東平陽^{へいよう}の人なり。県吏を以て平陽侯^{へいようこう}の家に給事し、侍者の衛少兒^{ゑいせうじ}と私通して去病^{きへい}を生む。中孺^{ちゅうじゆ}、吏畢^{しひ}りて家に帰り、婦を娶りて光を生む。因りて絶えて相聞せず。久しゅうして、少兒^{せうじ}の女弟の子夫^{しふ}、幸を武帝に得、立ちて皇后となる。

去病は皇后の姉の子なるを以て貴幸せらる。既に壮大にして、迺^{なほ}わち自のずから父の霍中孺^{かくちゅうじゆ}たるを知りしも、未だ求め問うに及ばず。会たま票騎將軍^{ひょうき}となりて匈奴を撃ち、道、河東に出ず。河東の太守郊迎し、弩矢を負うて先驅す。平陽の伝舎に至り、吏を遣わして霍中孺を迎う。中孺趨り入りて拝謁す。將軍迎拜し、因つて跪きて曰わく、去病早に自ずから大人の遺体たるを知らざりきと。中孺、扶服叩頭して曰わく、老臣の命を將軍に託するを得しは、これ天の力なりと。去病大いに中孺のために田宅奴婢を買い去る。還るとき復た

(一) 班固が著わした前漢の歴史の書であり、漢の高祖の元年(前二〇六)から王莽(おうも)の地皇四年(二三)に及ぶ二百二十九年間のことと記されている。すべてで一百巻から成り、帝王の事蹟を記した帝紀が十二巻、史実の理解に便利なようにした年表が八巻、礼楽、刑法、経済、地理、目錄学など志と称する専門的な記述が十巻、個人の伝を主とした列伝と称するものが七十巻である。このような体裁は全く「漢書」に先行する史書として有名な司馬遷の「史記」をまねたものである。後世の学者には漢書の欠点を挙げて非難する者もあるが、それにもかかわらず、いろいろな点でこの書の秀れた価値が認められ、後世に深い影響を与えており、「史記」と並んで正史の模範とされている。ここに訳出した霍光伝は、もとは節を分けたものではない(これは他の巻も同様である)が、都合で九節に分けたことをお断りし

け札をしていう。「老人のわたくしが、運命を將軍にまかせることができ
るようになりましたのは、全く天の力といひるのでございます。」去病は
中儒のために、田畑、家屋、奴隸の男女を多く買い与えてから出発した。
遠征からかえるとき、またも平陽に立ちよつて、弟の光を、西のかた長安
の都に連れかえることにした。そのとき光は十余歳であつたが、去病のお
かけで郎に任官し、次第に官があがつて、諸曹や侍中となつた。

去病の死後、霍光は奉車都尉や光禄大夫に任ぜられ、天子行幸の時は、
お召車の世話をし、宮中であつては、天子の側近にかしづくという生活が
つづいた。かくて、宮廷に出仕はじめてから、二十余年の歳月が過ぎ去
つた。その間彼は細心の注意を払い、身を謹んで、一度も過失を犯すこ
とがなかつたので、武帝から甚だ親しまれ、信頼されたのである。

征和二年(前九)に、衛太子が江充の謀略にかかつて叛せざるを得なくな
り、敗れて自殺するといふ大事件が起つた。ところが燕王の旦、広陵王の
胥というような皇子たちは、皇太子として次代を担うには、みなその行動
に過失が多くて不適任である。そのころ、武帝はすでに晩年で、鉤弋宮に
住んでいる寵愛あつた趙婕妤に男の子があつた。帝は、この子の後継者に
して、大臣にその輔佐を命じようと思つた。そこで、臣下の者どもをよく
氣をつけて見たところ、ただ霍光ひとりだけが、その重任に堪へ、国家を
託すべき最適任者であることがわかつた。そこで武帝は黃門の画工に命じ
て、その昔、周王朝の初め、周公が摂政となつて武王の幼児成王を抱いて
天下の諸侯をそのもとに参朝せしめた図を画かせて、それを光に下賜され
た。

後元二年(前八)の春、武帝は五柞宮に遊幸したが、病氣危篤に陥つた。
霍光は涙を流しつた。たずねた。「万一のことがございしたら、どなたさ
まをお世嗣としてよろしゅうございますか。」武帝がいう、「君はまだわた
しが前に与えた画の意味をさとらないのか。末の子を立てて、君が周公の
故事のように行なうがよい。」光は拜伏して辞退し、「わたくしは金日磾に
は及びませんから」といつた。日磾もまた、「わたくしは外国の生まれ、
霍光には及びません」といつた。武帝は霍光を大司馬大將軍とし、金日磾を

過り、乃ち光を將れて西のかた長安に至る。時
に年十余歳なり。光を任じて郎となし、稍やく諸
曹侍中に遷る。

去病の死後、光、奉車都尉光禄大夫となり、出
でては則ち奉車し、入りては左右に侍す。禁闥
に入ること二十余年。小心謹慎にして、未だ
嘗つて過ちあらざり、甚だ親信せらる。

征和二年、衛太子は江充の敗る所となり、而し
て燕王旦、広陵王胥も、皆な過失多し。この時、
上、年老い、寵姫鉤弋の趙婕妤に男あり。上、心
に以て嗣となし、大臣に命じてこれを輔けしめん
と欲す。群臣を察するに、唯光のみ大だ重きに任
え、社稷を属すべし。上、乃ち黃門の画者をして
周公成王を負きて諸侯を朝せしめしことを画かし
め、以て光に賜ふ。

後元二年の春、上五柞宮に遊び、病い篤し。光
涕泣して問うて曰わく、如し諱むべからざるあら
ば、誰か當に嗣とすべき者ぞと。上曰わく、君未
だ前の画の意を論らざるか。少子を立てて、君、
周公の事を行なえと。光頓首して譲りて曰わく、
臣は金日磾に如かずと。日磾も亦た曰わく、臣は
外国人にして、光に如かずと。上光を以て大司馬
大將軍となし、日磾を車騎將軍となし、及び太僕
の上官桀を左將軍となし、搜粟都尉の桑弘羊を御
史大夫となす。皆な臥内の牀下に拝し、遺詔を受
けて少主を輔く。明日武帝崩じ、太子尊号を襲ぐ。
これを孝昭皇帝となす。帝年八歳、政治毫に光に
決す。

ておく。

(2) 班固(三二—九二、字あきな)は孟堅、扶風安陵(今の陝西省咸陽の東)の人。一族に文学に秀でたものが多かつたが、彼も九歳のころからすでに文才を現わし、成人するともに博くいろいろな学に通じた。彼の父の彪は司馬遷の「史記」の終を受けて前漢の史書を著わす志を抱きつつ死んだ。固はその遺志を継ぎ、幸いに明帝の保護を受け、二十余年の歳月を費し、心血を傾けて完成した。すなわち「漢書」百篇であり、紀元八〇年ごろのことである。完成するや、早くその當時から重んじられて広く読まれ、現代に及んでいふ。その他、固は当時の学者の経学に関する論議を集めて「白虎通義論」を著わした。また文人としてすぐれており、漢時代最も文学的なものとして重んじられた賦の作家としても有数の大家であり、「兩都賦」など有名である。その文学作品は「文選」などに収録され

車騎將軍とし、また太僕の上官桀を左將軍とし、搜粟都尉の桑弘羊を御史大夫に任命した。四人の重臣は、帝の寢室の寢台のもとで命を拝し、帝の遺言を受けて、年若き天子を輔佐することになった。その翌日武帝は崩御して、皇太子が天子の称号をついだ。これを孝昭皇帝という。その時帝は年ようやく八歳のいとけなき、政治はすべて霍光によつて裁断されたのである。

（前二〇六）、すなわち霍去病より約十年後に死んだ。

（六）衛嬪（えいおう）の嬪。繼に三人の嬪がある。

（七）古く蒙古地方に栄えた遊牧民族である。漢の高祖はこれを征して大敗し、和平を請ねざるを得なくなつた。武帝は和平政策をやめて、衛青霍去病その他の將に命じ、大軍を以て戦ひ、その屈服を圖つたが完全に成功することができず、軍費と人員の喪失のため、兩國とも疲弊する結果を招き起こり、以後兩國は和親と抗争をくり返した。

（八）宮殿の門戸車騎などをつかさどる光禄に属した官。

（九）加官といつて本職以外に加えられる官である。左曹と右曹に分かれていて尚書の代理をした。書類などをつかさどつた。

（一〇）これも加官である。

（一一）武帝のとき初めて置かれた官で、天子の乗りものををつかさどつた。都尉はその長官をいう。

（一二）光禄勳に属した官である。光禄というのは前注のごとく宮殿門戸をつかさどつていたが（後世では専ら天子の御膳をつかさどる官となつた）、しかし光禄大夫はもと中大夫と稱していたのを、武帝のとき光禄大夫と改名したもので、加官の一種であり、議論顧問の役である。

（一三）漢書「卷六三」に見える「太子、名は槐（きよ）のこでである。衛皇后（子夫）の子。元狩元年（前一二）七歳で皇太子となつた。

（三）武帝の皇后衛子夫の甥にあたる。子夫の弟の衛青とともに匈奴を征して功があつたので冠軍侯に封ぜられ、その後もしばしば増封された。部下が精銳であつたのと、武運に恵まれていたのとで連戦連勝、大いに武帝の信任を得て、票騎將軍となり大司馬となつて、その威勢は大將軍であつた衛青の上に出る有様であつた。元狩六年（前一七）に死んだ。票騎將軍の票騎は、また驃騎ともいう。軍の行動の敏捷なことから名づけられたのである。

（四）今の山西省にあつた郡県の名。

（五）その当時は、漢の功臣曹參の子孫の曹寿が平陽侯になつてた。寿は驍の誤りという説がある。

（六）衛嬪（えいおう）の嬪。繼に三人の嬪がある。

（七）古く蒙古地方に栄えた遊牧民族である。漢の高祖はこれを征して大敗し、和平を請ねざるを得なくなつた。武帝は和平政策をやめて、衛青霍去病その他の將に命じ、大軍を以て戦ひ、その屈服を圖つたが完全に成功することができず、軍費と人員の喪失のため、兩國とも疲弊する結果を招き起こり、以後兩國は和親と抗争をくり返した。

（八）宮殿の門戸車騎などをつかさどる光禄に属した官。

（九）加官といつて本職以外に加えられる官である。左曹と右曹に分かれていて尚書の代理をした。書類などをつかさどつた。

（一〇）これも加官である。

（一一）武帝のとき初めて置かれた官で、天子の乗りものををつかさどつた。都尉はその長官をいう。

（一二）光禄勳に属した官である。光禄というのは前注のごとく宮殿門戸をつかさどつていたが（後世では専ら天子の御膳をつかさどる官となつた）、しかし光禄大夫はもと中大夫と稱していたのを、武帝のとき光禄大夫と改名したもので、加官の一種であり、議論顧問の役である。

（一三）漢書「卷六三」に見える「太子、名は槐（きよ）のこでである。衛皇后（子夫）の子。元狩元年（前一二）七歳で皇太子となつた。

（一四）江充は趙（ちやう）の邯鄲（かんたん）という所の生まれで、もとの名は江齊といつた。妹が琴や歌舞に巧みであつたのを利用して、趙の太子の且に嫁せしめ、それで且の父、趙王彭祖（ほうじ）から寵されるようになった。江齊がその秘密を王に密告したと疑がつて仲たがいを生じ、彼を捕えようとしたが逃がしてつた。わずかにその父兄を捕えて死刑にしたに過ぎない。逃亡した江齊は、西に旅して都に到り、名を江充と改め、宮中に乗りこんで且の悪事を告発した。武帝は且を取り調べたが、且の父趙王彭祖は帝の異母兄に当たるのをたより、太子の無罪を訴えた。それで且は、太子を廃せられるだけで済んだ。さて江充は、風采が堂々として

た。幼少のころは武帝から愛され大切にされたが、帝の晩年には、生母衛后の寵が衰へ、江充が權勢を握ることになった。充は太子や衛皇后の里と不和で、そこに暗雲が漂ふようになつた。太子にとつて不幸なことは、英主といわれた武帝も、年老いて病氣勝ちになると、猜疑心がつよくなつたことである。そこへわが身の安全をはかる江充の毒牙がのび、帝は側近者がみこおろしの一種の讒道（ごどう）というこゝとを行なつて呪うから病氣になつたと信ずるようになった。丞相の公孫賓（こうすん）の父、公主、衛皇后の甥の衛伉（えいこう）などが、このために誅せられた。帝の命を受けて巫蠱（おご）の獄を検察することになつた江充は、帝の疑心をかき立てるように、宮殿に蠱氣が充満していますといつて、宮中に到り、太子の御座を壊したり、地を掘りかえしたり、果ては太子の御輿に行つて、遂に桐の木偶（人形）を掘りだした。それは、あらかじめ埋められていたのである。このころ武帝は身体の調子が悪くて甘泉宮に遷着しており、都には皇后と太子とが残つていた。辯明するにも方法がなかつた。思い余つた太子は、部下を遣わして江充を斬り殺し、彼の手先となつた胡巫（こふ、外国人のみこと）を火焙りの刑に処した。勢いのおもむくようになって、長安の都に市街戦が行なわれたが、太子は敗れて逃亡した。しかし身分が発覚して捕縛がさし向けられて、縊死して果てたのである。後に至り、武帝は太子の無実を知つて大いに悲しみ、事件を起こした江充の一族はみな誅殺された。この戻太子の孫が、漢の中興の主といわれる宣帝である。

（一四）江充は趙（ちやう）の邯鄲（かんたん）という所の生まれで、もとの名は江齊といつた。妹が琴や歌舞に巧みであつたのを利用して、趙の太子の且に嫁せしめ、それで且の父、趙王彭祖（ほうじ）から寵されるようになった。江齊がその秘密を王に密告したと疑がつて仲たがいを生じ、彼を捕えようとしたが逃がしてつた。わずかにその父兄を捕えて死刑にしたに過ぎない。逃亡した江齊は、西に旅して都に到り、名を江充と改め、宮中に乗りこんで且の悪事を告発した。武帝は且を取り調べたが、且の父趙王彭祖は帝の異母兄に当たるのをたより、太子の無罪を訴えた。それで且は、太子を廃せられるだけで済んだ。さて江充は、風采が堂々として

た。幼少のころは武帝から愛され大切にされたが、帝の晩年には、生母衛后の寵が衰へ、江充が權勢を握ることになった。充は太子や衛皇后の里と不和で、そこに暗雲が漂ふようになつた。太子にとつて不幸なことは、英主といわれた武帝も、年老いて病氣勝ちになると、猜疑心がつよくなつたことである。そこへわが身の安全をはかる江充の毒牙がのび、帝は側近者がみこおろしの一種の讒道（ごどう）というこゝとを行なつて呪うから病氣になつたと信ずるようになった。丞相の公孫賓（こうすん）の父、公主、衛皇后の甥の衛伉（えいこう）などが、このために誅せられた。帝の命を受けて巫蠱（おご）の獄を検察することになつた江充は、帝の疑心をかき立てるように、宮殿に蠱氣が充満していますといつて、宮中に到り、太子の御座を壊したり、地を掘りかえしたり、果ては太子の御輿に行つて、遂に桐の木偶（人形）を掘りだした。それは、あらかじめ埋められていたのである。このころ武帝は身体の調子が悪くて甘泉宮に遷着しており、都には皇后と太子とが残つていた。辯明するにも方法がなかつた。思い余つた太子は、部下を遣わして江充を斬り殺し、彼の手先となつた胡巫（こふ、外国人のみこと）を火焙りの刑に処した。勢いのおもむくようになって、長安の都に市街戦が行なわれたが、太子は敗れて逃亡した。しかし身分が発覚して捕縛がさし向けられて、縊死して果てたのである。後に至り、武帝は太子の無実を知つて大いに悲しみ、事件を起こした江充の一族はみな誅殺された。この戻太子の孫が、漢の中興の主といわれる宣帝である。

（一四）江充は趙（ちやう）の邯鄲（かんたん）という所の生まれで、もとの名は江齊といつた。妹が琴や歌舞に巧みであつたのを利用して、趙の太子の且に嫁せしめ、それで且の父、趙王彭祖（ほうじ）から寵されるようになった。江齊がその秘密を王に密告したと疑がつて仲たがいを生じ、彼を捕えようとしたが逃がしてつた。わずかにその父兄を捕えて死刑にしたに過ぎない。逃亡した江齊は、西に旅して都に到り、名を江充と改め、宮中に乗りこんで且の悪事を告発した。武帝は且を取り調べたが、且の父趙王彭祖は帝の異母兄に当たるのをたより、太子の無罪を訴えた。それで且は、太子を廃せられるだけで済んだ。さて江充は、風采が堂々として

しており、辯論に巧みで、匈奴に使いし帝の信頼を得、直指使者という検察官となって都の賊を捕え、貴族や近臣の行動を偵察監督した。そのため、不行跡な貴族の子弟たちは、罰金を払って罪の赦しを乞わねばならなくなつた。その金額は数千万に上つたという。ある時江充は、太子の使者が、太子だけが行幸のとき通る道を馳せているのを発見した。太子はそのことが太子に聞こえるのを嫌がったが、江充は構わずに摘発した。彼はそれによつて太子の信任をいよいよ得ることになったが、太子との仲がますます悪つたことはいふまでもない。たまたま、宰相公孫賀の子の敬声というものが罪に問われていたのが、そのころ都に、朱安世という俠盜がいた。朝廷では彼を捕えようとしたが、うまくいかなかった。公孫賀は自分の手で安世を捕えて、敬声の罪の償いをしたいと願ひ出て、望みどおり捕えることができた。ところが朱安世は獄中から

上書して、敬声の非行を免ぎ、且つ彼は巫に命じて偶人（にんぎょう）を作り、太子を呪詛してゐると告げた。公孫賀父子は牢獄に入れられて死んだ。このように巫蠱といふことは、もと朱安世が始めたものである。この事件後、武帝は甘泉宮に行幸したところ、病氣にかかつて重態になった。江充は武帝が死んで、自分と仲のわるい太子が即位すると殺されると恐れ、安世が称し始めた巫蠱を利用せんものと姦計をめぐらし、太子の病氣は巫蠱の祟りであるとして奏した。武帝は江充に取調べを命じたが、彼は胡巫に命じて、あらかじめ木偶（にんぎょう）を地に埋めておき、それを掘り出して自己の主張の正しさを証するという卑劣な手段をとつた。するとそれに乗じて仲の悪い人民たちが互いに密告しあい、死者数万人に達したという。危篤であつた武帝は、病氣を側近者の巫蠱のためと疑がつた。江充は後宮の夫人、皇后の住居な

どを取り調べ、遂に自己に好意を持たぬ太子の宮を掃つて桐の木偶を取り出した。窮地に迫りこまれた太子が江充を殺して叛せざるを得なくなつたこと、武帝が後に江充の許を知つてその一族を誅したことは、衛太子の注で述べたとおりである。（15）燕といふ国の王で、武帝の子である。広陵王晋ととも母は李姬（陵王き）といつた。生まれつき才略があつて、学園武芸を習ひ、遊俠の士と交わつた。衛太子が叛乱して失敗したとき、燕王の兄にあたる齊王もすでに病死してゐたので、諸皇子の中では燕王が最も年長であつた。彼は当然帝位につけると期待したところが末子で立つて昭帝となつたのである。不滿な彼は流言を放ち、皇族らと謀つて武帝の詔といつて群臣に命を下して、昭帝は実は霍光の子であるから討つべきぞと称して、反乱をおこそうとした。それは失敗したが、昭帝は旦の罪を許して問わなかつた。ところ

が後文にも見えるとおり、蓋長公主（がいちようこうしゅ）や上官桀（じょうかんけつ）らが霍光を倒そうとしたとき、彼はその一味に加つて、自ずから太子たらんとし、上書して霍光の非を鳴らした。謀反は再び失敗して上官桀らは誅せられ、昭帝は書を送つて且を痛烈に責めた。かくて彼は自殺して果てたのである。（16）燕王且の弟である。幼少のとき広陵（揚州）に封を受けて王となつた。成人するに従ひ遊びがすきで、強力な手でもかせて猛獸を手でうち殺したいりするなど、その行ないに道にはずれたことが多く、次代の天子となる機会を失した。昭帝が即位したとき年少で嗣子がないうのを見て、次代の帝位をねらい、女巫を信じて呪詛を行なわしめた。昭帝が死んで宣帝が即位してから、帝の手あつてい思へるにもかかわらず不法なことが多く、呪詛を行なつてゐることが發覺してついに自殺した。（17）鉤では長安にあつ

た宮殿の名。趙といふのは姓で、健将は健好とも書き、武帝のとき置かれた女官である。彼女の子が昭帝で、太始三年（前九四）に生まれた。武帝はこの末子に帝位をつがせようと思つたが、趙婕妤がまだ若く、その子が天子になつたとき、政治に關係して國家を乱すであろうと案じ、小さな過ちを取り立てて彼女を誅責し、そのために憂死したといふ。（18）その当時、少府といつて、山海池沢の收入を以て天子の生活をまかなう官があつた。黄門はこの少府に属して、いわゆる宦者（かんじや）がこれになつた。天子日常のご用をつとめる職である、画工などもいたつたから、画工などもい

そこで周公は、かりに王の位について政治を行ない、建国後でもない周の基礎を固めようとした。すると周公の兄弟などが反対し、彼はまことの王位をねらうものであるといふらして乱をおこした。周公は反対者を平らげ、政治をとり行なうことと七年にして、王の位を成王に返したといはれてゐる。（20）長安の西にあつた離宮の名。中に五本のすばらしく大きな柞（は）の木の木があつたので、五柞宮と稱した。（21）もと匈奴の貴族の子として生まれた。霍去病が匈奴を征してこれを破つたため、敗戦の責任問題から匈奴に内紛がおこつて父は殺された。十四歳の日磾は漢の奴隷がおちぶれて、宮中の馬飼ひとなつた。ある日、武帝が馬を検閲したところ、日磾の馬がきわだつてよく肥えており、その上彼が人並みはずれて丈高い偉丈夫であつたので、帝の目にとまり、馬監にとり立てられた。その後、信頼は増すばかりで、常に帝の側近く従う身となつた。後文にも見える葬何羅（もうから）が武帝を刺殺しようとした時、日磾はこれをつかへ、その功によつて秣陵（もくろう）に封ぜられた。武帝臨終のときは、その遺詔により、霍光とともに昭帝をたすけて、まじめな生涯を終つた。（22）もと丞相の次に重要な官位として太尉という武官が設けられていたが、武帝のとき太尉をやめて、代りに大司馬が置かれることになつた。武官の最高位で、將軍の号の上に加えられるものであり、属官があつて幕府を置いた。（23）漢時代の將軍の一で、上卿といふ高い位であつた。幕府を置いて近衛の軍、および外敵のことをつかさどつたが、宮城の守衛に主たる任務であつたと思はれる。（24）九卿といふ高い位の一で、天子の馬のことをつかさどつた。（25）隴西（ろうせい）の人といふから、今の甘

肅省の生まれである。早くから武人として武帝に仕えたが、帝が甘泉に幸して大風にあつたとき、強力を発揮して出世の端緒をつかんだ。侍中を経て太僕に任ぜられ、謀反した莽通（もうとう）を斬つた功により安陽侯に封ぜられた。武帝危篤に際しては、遺詔を受けて、霍光とともに昭帝を輔佐することになったが、彼の子の安は、霍光の娘と結婚しているというやうな関係もあつて、光が休暇をとつたときは、桀が代理をつとめた。昭帝は八歳の幼年で即位したので、姉の蓋長公主（がいちようこうしゅ）が宮中において、帝の面倒をみていた。そのころ、公主

は丁外人というものと関係があつたが、霍光は知らぬ顔をしていたばかりでなく、反つて天子の詔として、外人を公主に近づけるよう取り計らつた。公主はまた、昭帝の皇后となるべき候補者をさがしてゐたが、桀の子、上官安の娘は霍光からいつでも孫娘にあたつてゐるよう、霍光に皇后となる、まだ年が若いからと聘を入れてくれぬ。丁外人と親しかつた安は、蓋長公主を説きつけて、丁外人を諸侯に取り立ててくれるよう霍光にたのんだ。上官桀と安は深く光を怨むようになり、これに反して、蓋長公主が目をつけてくれるのをありがたくくれれば、その功だけで思つた。その後、不平を

抱く燕王旦らと謀を通じ、それが失敗して反対者がみな誅せられたり自殺したことは後文に見える。
(26) 車騎將軍と同じく上卿の位であつた。当時、前後左右の四人の將軍があつたが、いつも置かれた官ではない。幕府を有し、兵備に任じ、外敵侵入の守備をつかさどつた。
(27) 農業に関する大臣は大司農といつたが、搜粟都尉というのは、武帝のときの武官の一で、いつも置かれていたのではなく、當時としては最も重要な農業政策に関係し、国庫の収入をはかつた。

武帝はしばしば外征して、軍費は莫大の額にのぼり、晩年にはその失敗を認めざるを得なかつた。そこでいろいろと財政の建て直しに心をくだいたが、当時越過（ちょうか）といふものが、搜粟都尉に任ぜられて、農業改革に功があつたといふ。
(28) 洛陽の商人の子。財力を以て十三歳で仕官して侍中となり、やがて大農丞という会計の官となつて、財政の建て直しを計つた。武帝の元封元年（前一二〇）には治粟都尉となり、大司農の代理をつとめ、いよいよ理財の手腕を振うことになつた。（漢書食貨志によると、桑弘羊がなつたのは治粟都尉であつて、搜粟都尉ではない。何か誤りがあると思われるが、よくわからない。）彼は

鉅鉄・酒權・均輸・平準・売官・贖罪というやうな経済政策を次ぎから次ぎへと行ない、その結果、政府の財政は豊かになつた。その功により御史大夫となつて武帝の遺詔を拜し、昭帝を助けることとなつたのである。当時のインテリが彼の財政政策に反対したが、きかぬやうとしなかつた。さくのごとく、桑弘羊は國家の財政に大功があつたので、その子弟のため

にまかせず、怨みを抱いてついに謀反に加わり、失敗して誅せられた。
(29) 漢では丞相・太尉と並んで三公と稱し、最高の官位の一であつた。丞相の副として、丞相等をたすけて政を行ない、その属官は、司法官として不法をただしたり、書籍文書をつかさどつたりなどした。後世では専ら官吏の弾劾に任ずるやうになつた。

(一)

これより前、後元年に、侍中僕射の莽何羅といふものが、弟の重合侯莽通とともに、武帝を暗殺しようとしたことがある。そのとき霍光は金日磾や上官桀らとともに莽何羅兄弟を誅した。しかしその功勞はまだ取り上げられず、褒賞が行なわれていなかった。武帝が病氣危篤になつたとき、天子の印をおした遺書をつくり、封をして、「われなき後、この遺書を開いて、それに書かれてあるとおり事を運ぶようにせよ」といつた。その遺詔

(二)

これより先、後元年、侍中僕射莽何羅、弟の重合侯通と、逆をなさんと謀る。時に光、金日磾上官桀等と共にこれを誅す。功未だ録せず。武帝病む。璽書を封じて曰わく、帝崩ぜば、書を發して以て事に從えと。遺詔して金日磾を封じて桀侯となし、上官桀を安陽侯となし、光を博陸侯となす。

(1) 後元年は後元年の略称（前八八）。武帝は翌二年の二月に七十歳で死んだ。
(2) 侍中は天子側近の官であるが、その監督の地位にあるものを侍中

には、金日磾を穉侯に、上官桀を安陽侯に、霍光を博陸侯にそれぞれ封ずるゝとあつた。これはいづれも、以前反逆をくだした王莽を捕えたと功勞によるものであつた。そのとき、衛尉の王莽というものの子の忽が侍中となつてゐたが、彼がいふらすう、「武帝のご病氣が重くなられたとき、わたしはいつも帝のそば近くにいた。それでよく事情を知つてゐるが、遺詔をお書きになつて三人のものを諸侯にとり立てるといふことなかありはしなかつた。彼らつまらぬ者どもが、自分で勝手にわが身を貴くしようとしてゐるのに過ぎない」といふ。これを聞いた霍光は、痛烈に王莽を非難した。窮した王莽は、わが子の忽を酖の毒薬をもつて殺さざるを得なかつた。

霍光はその人柄が落ちつきがあつても静かであり、こまかいことにもよく気がついて、おろそかにしなかつた。身の丈は僅かに五尺六寸にすぎなかつたが、色が白く、眉と目との間がやや開いて、はっきりした顔をしており、美しい頤ひげと頬ひげをもつていた。宮中に仕出して、門を退出するたびに、その止まるどころ、進み行くところが一定してゐる。郎僕射がひそかに目印をしてみると、同じところを歩いたり、同じところ止まつたり、少しの狂いもない。彼の性格がきちようめんであつたことは、これによつてもわかるであらう。彼がはじめて幼ない昭帝を輔佐して、政治を彼自身で行なうようになった時は、天下の者は彼がいかなる人であらうかと、いろいろとその様子を噂しあつて想像するのであつた。かつて、御殿に妖怪が現われるというので、ある晩のこと、臣下ものどもが驚き騒いだことがある。変事を心配して、霍光は尚符璽郎を召し、彼が保管している符璽を取り上げようとしたところ、郎はどうしても承知しない。光はむりやりに奪ひとろうとした。するとこの郎は劍のつかに手をかけて身構えをし、「わたくしの首はとることができても、天子の御印をとることはできませんぞ」といふ。光はその度胸や態度のよさに感心し、翌日詔を下して、この郎の俸給を二階級上げてやつた。このことをきいた人々は、霍光の処置をりつぱなことだと感心しないものゝなかつた。

光は左將軍の上官桀と結婚關係から親しい間柄となつてゐた。すなわち

皆な前に反者を捕えし功を以て封ぜられしなり。時に衛尉王莽の子男忽侍中たり。揚語して曰わく、帝の病みたまひしとき、忽常に左右に在り。安んぞ遺詔して三子を封ずる事あるを得ん。群兒自ずから相貴くするのみと。光これを聞き、切に王莽を誅む。莽、忽を酖殺す。

光、人と為り沈靜にして詳審なり。長財かに七尺三寸、白晢にして、眉目疎に、須鬚美なり。出入し殿門を下る毎に、止進に常処あり。郎僕射窃かに識してこれを視るに、尺寸を失わず。その資性端正なることかくの如し。初めて幼主を輔けて、政己れより出するや、天下その風采を想聞す。殿中嘗つて怪あり。一夜群臣相驚く。光、尚符璽郎を召す。郎、光に授くるを肯んぜず。光これを奪わんとす。郎劍を按じて曰わく、臣の頭は得べし、璽は得べからざるなりと。光甚だこれを誼しとし、明日詔してこの郎の秩二等を増す。衆庶、光を多とせざるなし。

光、左將軍桀と結婚して相親しみ、光の長女は桀の子の安の妻となる。女あり、年帝と相配す。桀、帝の姉の鄂邑蓋主に因り、安の女を後宮に内れて使侍となす。數月にして、立ちて皇后となる。父の安は票騎將軍となりて、桑樂侯に封ぜられ、光、時に休沐して出ずれば、桀輒わち入りて光に代り事を決す。

桀父子既に尊盛にして、長公主を徳とす。公主内行修まらず、河間の丁外人を近幸す。桀と安と外人のために封を求めんと欲し、国家の故事に依り、列侯を以て公主に尚せんことを幸う。光許さ

僕射といふた。僕射は侍中だけでなく、他の官にもこれがおかれてゐる。僕とは、主（つかさどる）という意である。昔は武を重んじたので、射をつかさどるという意味で僕射と名づけたのがこの語のはじまりである。（3） 莽何羅はもと馬何羅といつたが、後漢の明帝に馬皇后というのがある、反逆者と同姓であることをきらつたので、莽何羅と改められたので、征和二年、衛太子が江充の毒牙にかかつて反乱をおこしたとき、何羅の弟の通は太子の軍を討ち、その功によつて重合といふところの諸侯にとり立てられ、重合侯と稱した。翌三年（前九）には、江充の悪事が露見して武帝は大いに怒り、彼とその一族及び當時彼に従つたものは、みな死刑になつたり罰せられたりした。莽何羅とその弟の通とは江充と親しかつたので、憐れが身にふりかかるとを恐れて、謀反をくだてるに至つた。ところが金日

光の長女が桀の子の安^あというものの妻となつていたのである。二人の間に娘があつて、昭帝とは似合いの年ごろ。桀は昭帝の姉の鄂^{かく}呂^{りょ}蓋^{がい}主^{しゅ}に渡りをつけて、安の娘を後宮に納れ、使^し僮^{どう}にしてもらつた。ところがわずか数月で皇后の位につき、そのおかげで、父の安は票^{ひょう}騎^き将^{しょう}軍^{ぐん}となつて桑^{そう}樂^{らく}侯^{こう}に封ぜられ、光が休暇をとつて出仕しない時は、桀が宮中において光の代理をして政治をとり行なつた。

上官桀とその子の安は、このように尊い身分となつて、家が榮えるようになり、これも長公主のおかげとありがたく思つた。公主は品行がよくなくて、河間生^{かへんせい}まれの丁^{てい}外人^{がじん}というものを近づけ愛していた。ご恩返しにと桀と安は外人を諸侯にとり立ててもらつて、漢の朝廷の習^{しゆ}わしにより、諸侯の身分として公主と結婚させようと願つた。霍光は承知しない。それではというので、外人を光禄大夫にして、天子がお召し出しになれるよう頼んでみたが、相変らず承知しない。長公主はこの事から非常に光を怨むようになった。桀と安もたびたび外人のために官爵を要求したが、それが得られないので面目を失つて、彼らもまた心に慚^はじた。先帝^{武帝}の時から、桀はすでに九卿という高官の一人になつていて、その地位は光より上にあつた。桀は左将軍、安は票騎将軍とそろつて將軍に任ぜられ、皇后の里方^{りほう}という後ろだてをもつ顯要な身分であつて、皇后は安自身の娘である。光は皇后からいへば母方の祖父という身で、桀や安よりもつながりがうすい。それなのに反つて朝廷の政治を自分一人の手で思うがままに行なつてゐるというので、それらの理由から光と權勢を争うようになった。また燕王の且^ちは、昭帝の兄という身であるにかかわらず天子になれなかつたというので平素から怨みをもつていたし、さらに、御史大夫の桑弘羊は、酒や塩鉄の専売を始めて、国家のために大きな利益をもたらしたというのでその功勞に誇り、子弟のため官を得ようとしてはねつけられ、彼もまた光を怨んでいた。

そこで蓋主、上官桀、その子の安、及び桑弘羊らは、みな燕王且とよからぬ謀を相談しあつて、まず人にたのんで燕王に代わり天子に上書せしめた。その内容は、「霍光は郎や羽林の軍の總教練に出かけて行き、彼の

ず。又た外人のために光禄大夫を求め、召見を得しめんと欲す。又た許さず。長主大いにこれを以て光を怨む。而して桀と安も数しば外人のために官爵を求めしも得ること能わざりしかば亦た慙^はず。先帝の時よりして、桀已に九卿となり、位光の右に在り。父子並びに將軍となるに及んで、椒房中宮の重きありて、皇后は親しき安の女なり。光は迺^{なほ}わちその外祖なるに、而も願つて朝事を專制す。これに繇^よつて光と權を争う。燕王且は自ずから昭帝の兄なるを以、常に怨望を懷^{いだ}く。及御史大夫桑弘羊は、酒榷塩鉄を建造して、国のために利を興し、その功に伐りて、子弟のために官を得んと欲し、亦た光を怨恨す。

ここに於いて蓋主・上官桀・安及び弘羊、皆な燕王且と謀を通じ、詐りて人をして燕王のために上書せしめて言わく、光出でて郎羽林を都肄^{とと}し、道上にて驍^{せう}を称し、太官は先置す。又た引へば蘇武は前に匈奴に使用して、拘留せらるること二十年なりしも降らず、還りて迺^{なほ}わち典属国となりしのみ。しかるに大將軍長史の敵^{てき}を功亡^{こうむつ}きに搜粟都尉となし、又た擅^{したん}いままに莫府校尉を調益す。光の専權自恣なる、疑うらくは非常あらん。臣且願わくば符璽を歸し、入りて宿衛し、姦臣の変を察せんと。光の出沐の日を候司してこれを奏し、桀は中よりその事を下さんと欲し、桑弘羊は諸大臣と共に光を執え退くることに当たらんとす。

書奏す。帝下すを肯んぜず。明且、光これを聞き、画室中に止まりて入らず。上、大將軍安くに在りやと問う。左將軍桀對えて曰わく、燕王のそ

碑^いがそれを感じて警戒したので、莽何羅も用心をして、ひそかに機會のおとずれのを待つことにした。江充が誅せられてから二年後の後元元年六月、武帝は甘泉宮に行幸した。莽何羅は暗殺の目的を達せんものと、ある日朝早く、帝の寢室に忍び入ろうとした。側近として警戒を怠らなかつた金日磾がこれを見つけたので、弟の莽通は、霍光と上官桀によつて斬られたという。

(4) 衛尉は天子のおられる未央宮の護衛をつかさどる官である。宮殿内にその官署があり、九卿の一で重臣であつた。王莽がこの官になつたのは昭帝が即位した始元元年(前八六)で、三年間その職にあつた。同じく元年に、金日磾は病んで危篤におちいり、遺詔によつて稚侯に封ぜられて死んだ。霍光と上官桀とは始元二年に諸侯となつたから、本文に語られてゐるのは、そのころのことである。

通る道の交通止めを行ない、膳部の官たる太官は、天子よりもさきに彼の食事の用意をするというような、身のほどをわきまえぬ不敬なことを行なっている。また例えば、蘇武は以前匈奴に使いして捕えられ、二十年という長い間異境の果てに留置せられたが降伏せず、非常な苦しみをなめた。それにもかかわらず、帰朝して典属国に任ぜられたに過ぎない。しかるに光の部下たる大將軍長史の楊敞は、何らの功もないのに、搜粟都尉に昇進するといふ不公平なことをし、あるいはまた、勝手に彼の幕府の校尉を任命して、その人数を増すというような不都合なことをしている。かくのごとく光は独断専行で、きまみにふるまっているからには、なにか変事をおこすのではないかと疑われる。そこでわたくしは、現在頂いている王としての符節と印とを陛下にお返ししたし、都に到り宮中において宿直警備して、姦臣の光がいかなる変事をたくらんでいるか見とどけたい」というのであった。この上書を、光が休暇をとって不在の折りを伺って天子のもとにさし出し、彼の不在中その代理をしている桀が宮中であつてそれを係りの官に下げわたして会議にかけるよう取りはからい、桑弘羊は大臣たちとともに光を描えて脅迫し退職せしめることを引き受ける、というように手はずをきめた。

燕王の上書がさし出された。昭帝はそれを手もとに留め置いたままで、臣下下げわたして評議せしめようとしなない。翌朝、霍光はこれを聞いて、宮中の画室に控えたまま御前に出ようとしなない。昭帝は、「大將軍はどこにいるのか」とたずねられた。左將軍の桀が答えていう、「燕王が彼の罪を上奏したものでございますから、まかり出ようとしなないのでございませう。」天子のお言葉があつて、大將軍をお召しになった。光は進み出てわが冠をぬぎ、低く頭をさげて天子を心配させた罪のお詫びをした。天子が申されるよう、「將軍よ冠をつけるがよい。わたしはこの上書を嘘偽りであるとは知っている。將軍には何の罪もないのだ。」光がいう、「陛下はどうしてそれがおわかりでございますか。」天子が申されるには、「將軍が広明亭に出かけて郎の者どもに軍事教練をしたのは、最近のことである。また、校尉を任命してから、まだ十日とたつていない。都を遠く離れている燕王

の罪を告げしを以ての故に敢えて入らずと。詔ありて大將軍を召す。光入りて、冠を免ぎ頓首して謝す。上曰わく、將軍冠せよ。朕この書の詐りなるを知る。將軍は罪亡しと。光曰わく、陛下何を以てこれを知るか。上曰わく、將軍の広明に之き郎を都せしは属ごろのこののみ。校尉を調して以来、未だ十日に能はず。燕王何を以てこれを知るを得ん。且つ將軍非をなさんとせば、校尉を須たずと。この時帝は年十四のみ。尚書左右皆な驚く。而して上書せし者果たして亡げ、これを捕えんとすること甚だ急なり。桀等懼れ、上に白すらく、小事にして遂ぐるに足らずと。上聴さず。後、桀の党与に光を誣する者あり。上輒わち怒りて曰わく、大將軍は忠臣にして、先帝が属して以て朕の身を輔くる所のもの、敢えて毀る者あらばこれに坐せんと。これより桀等敢えて復た言わず。酒に謀りて長公主をして置酒して光を請わしめ、兵を伏せてこれを格殺し、因りて帝を廃し、燕王を迎立して天子となさんとす。事発覺す。光尽とく桀・安・弘羊・外人・宗族を誅し、燕王蓋主皆な自殺す。光の威海内に震う。昭帝既に冠せしも、遂に光に委任して、十三年に訖る。百姓充実し、四夷賓服せり。

(5) 酖はすなわち鳩(ちん)という毒のある鳥である。その羽でかきまぜた酒を人が飲めば死ぬという。なお後世の學者には、霍光三人を侯に封ずるという遺詔はなかったので、王莽の子が偽りだといったのがほんとうだと説く者があって、事の漏れるのを防いだのだという。

(6) 郎は宿衛侍從の官で定員がなく、宮中であつていろいろなことをつかさどつたが、その監督の長官が郎僕射である。

(7) 尚とはつかさどるという意で、宮中であつて真偽を定める割符や天子の御印をつかさどつた官。

(8) 鄂邑蓋主は武帝の娘で昭帝の姉である。主は公主で天子の娘のこと。彼女が、諸侯の一人で蓋侯、その名を王充というものの妻になつていたから蓋主という。鄂邑はこの公主がもつていた領地の名。

(9) 鄂邑蓋主をさす。長公主とは天子の姉妹を

が、このようなことがあったとどうして知ることができようぞ。その上、もし將軍が謀反のごとき非望を遂げようとすれば、なにも一人二人の校尉の任命など必要ともしないであろう」とのお言葉。この時帝は年わずかに十四歳にすぎなかったもので、これを聞いた尚書や左右のものは、その聡明なのに驚いた。果して、燕王に代つて上書したものは危険を感じて逃亡し、それを捕えようときびしい詮索である。上官桀らは災いの降りかかるのを恐れて、「これは大したことではございませんから、さしてきびしくご糺明なさるほどのことでないと存じます」というが、天子は承知しない。その後、桀の一味の中に霍光を悪しざまにいうものがあつた。天子は怒つて仰せあるよう、「大將軍は忠臣であり、今は亡き父上がわたしを輔佐するようにたのまれたものである。それでもなお悪口などいおうとする者あれば、罰を与えるぞ」とのこと。それからというものの桀らもさすがに再びとやかくいおうとしなかった。そこで今度は、長公主に酒宴を開かせて光を招待し、ひそかに兵を伏せておいて彼を打ち殺し、すかさず昭帝を位からおい退け、代りに燕王を迎えて天子におし立てようとたくらんだ。ところがこれが露見して、光は桀、安、桑弘羊、丁外人、及びその一族をことごとく誅し、燕王と蓋主はともに自殺するという事になつて結末がついた。この事あつて以来、霍光の威権は天下にひびき渡つたのである。昭帝は成人して冠をつけるようになったが、その後、そのまま政治は霍光にまかせて十三年間に及んだ。そして国民は富み栄え、四方の異民族はなびき従うようになったのである。

た。 いう。郾邑蓋主は昭帝の姉にあたる。

(10) 河北省にある地名。 當時は王国、すなわち天子の子の領地として治められていた。

(11) 丁は姓、外人は名である。蓋長公主の子の客分として出入りしてい

(12) 太常、光祿勳、衛尉、太僕、廷尉、大鴻臚、宗正、大司農、少府の九つの官長を九卿といつた。

上官桀は九つの中の太僕であつたことが前に見えていた。

(13) 本文の「椒房」は

椒房殿といつて皇后の住居である。当時の都は長安だが、城中に天子の住居たる未央宮というのがあつて、椒房はこの宮の中にあつた。

(14) 本文の酒權とは酒の専売をいう。財政の窮乏を救う手段であつた。

(15) 郎は前の注でも述べたとおり、光祿勳の配下で、宿衛侍從の官であるが、その任務によつてそれぞれ名称があつた。たとえば車のことをつかさどるは車郎、門戸のことは戸郎という類である。それらを總稱して郎

といつた。羽林は羽林騎のこと、これも同じく光祿勳に属し、武帝の時から置かれた。禁軍、すなわち近衛の軍で、行列に従うなどがその任務であつた。また戦死者の子孫を養つて羽林官が武技を教えたのを羽林孤儿といつた。

(16) 太官は天子の食事をつかさどる官で、少府に属していた。少府は天子の生活をまかなう官である。

(17) 蘇武は蘇建という將軍の二男として生まれた。武帝の天漢元年（前

一〇〇）友好使節として匈奴に使したが、折りからの内乱に巻きこまれて匈奴に抑留された。蘇武は恥を受けるよりはとしばしば自殺を図つたが留められて果たさず、匈奴の王の單于是その節義に感じて莫大な利益を以て彼を誘惑し、しきりに降伏を勧めた。しかし堅く節義を守つて降伏しない。ついに彼を北のはての北海無人の荒原に移して羊を飼つて自活せしめた。風や草を食つて飢えをしのぐという苦しい生活がつづいた。昭帝が即位して、漢と匈奴との間に平和が訪れたとき、蘇武はやつと漢に帰ることができた。始元六年（前八二）である。使節として都を出てから実に十九年の後であり、四十歳で使臣に出て、六十歳で帰るのである。かつての黒髪は、流れ去る年月と長い辛苦のため、すっかり白くなつていた。漢ではその労に報いるため、彼を典屬國に任命した。霍光の取計によるものと思われる。ところが帰朝

